

第4回 社会進化と資本主義——スペンサーとマルクス 産業革命の衝撃をどう見るか

1. 背景としての産業革命

- 18世紀後半のイギリスでは、木綿工業が飛躍的に発展。蒸気機関の発展と製鉄業・石炭産業の発展が結びついて、経済全体が急速に成長した。
- 毛織物工業も発展。地主が小作人を追い出して、牧羊地にする（囲い込み）。農民は、工場労働力として都市に流入。
- 都市では、工場制手工業から**機械制大工業**へ。貧困、公衆衛生、住宅不足などの労働問題・都市問題が生じて、資本家と労働者の階級対立が激化した。
- 18世紀の末に、フランスとの覇権争いに勝利したイギリスは、「世界の工場」と呼ばれるようになった。
- 産業革命は、19世紀にフランスやアメリカに波及。社会生活を一変させていく。
- スペンサーは、19世紀中頃のイギリスを社会進化の最先端にあるととらえた。一方、マルクスは、工業化の進む社会を資本主義社会としてとらえ、その矛盾に焦点を当てた。

2. スペンサー (Herbert Spencer, 1820 ~ 1903, E)



Herbert Spencer

- 父は、科学を信じる無神論者。叔父は自由放任主義者。
- スペンサーは、学校教育を受けていない。また、終身独身で貧乏であった。
- 1837年 ロンドン・バーミンガム鉄道の技師
- 1848年 『エコノミスト』編集部。以来、著述業。
- 1855年 『社会静学』 → 『社会平権論』（日本で初めて翻訳された社会学の本）
- 1862年 『第一原理』（進化論）
- 1876 ~ 96年 『社会学原理』

(1) 社会有機体説

社会は生物のような有機体である。社会を生物に見立てる（有機体アナロジー）。社会学のお手本を生物学に求める。

- 社会は成長するものであって、つくられたものではない。社会を生物と同じ自然としてとらえる。
- 社会と生物有機体との類似点
 - ・ **量的成長**——社会は、小さな集合から始まって、次第にその量を増し、最後には、最初の数千倍の大きさに発展する。

・ **構造の複雑化**——はじめ、社会の構造はきわめて単純であるが、成長するにつれて、構造の複雑さを増す（細胞が分かれて機能が分化するように、職業が分化してくる）。

・ **相互依存性の増大**——未発達の状態においては、諸部分間の相互依存関係がほとんど存在していないが、成長の過程において、関係が緊密になり、各部分の活動および生命が他の部分の活動および生命によって制約されるようになる（細胞は、他の細胞に依存しない段階から、他の細胞が構成する器官の活動に依存するようになる。同じように、社会の構成員は、だれもが他の職業活動に依存するようになる）。

・ **構成単位からの独立性**——社会の生命は、これを構成する諸単位の生命から独立に永続する。これらの諸単位は、生まれ、成長し、増大し、死滅するにもかかわらず、これらのよって形成される社会は生き延びて、量、構造の完全性、機能の多面性が増大する。

●生物有機体とのアナロジー

	動物	社会
維持システム	腹部（消化器）	産業
分配システム	心臓と血管	道路網
規制システム	大脳、神経系	国家

●生物有機体との違い

- ・ 社会が一定の外的形態をもっていない点
- ・ 個体有機体を構成する組織が一塊をなしているのに反し、社会の諸要素は地表のある部分に散在している点。
- ・ 個体有機体の諸単位がある場所を占めているのに対して、社会の諸単位は一定の場所をもたない。
- ・ 動物では、特殊な組織のみが感情を与えられているのに対し、社会有機体では、全単位が感情を与えられている点。→社会のすべての単位が個人的意識をもつ。

(2)社会進化論

●進化の一般原理

量的成長→構造の複雑化・分化→相互依存性の増大（分化－統合図式）。

●単純社会から複合社会へ。凝集化・異質化・確定化（秩序の明確さ）が進む。

●進化をとおして、自然および外社会にたいする適応力が増大。

軍事型社会→産業型社会

●社会の進化→（分業の発達・異質性の増大）→個人意識の発達・個人の自由の拡大→（自由競争）→最適者生存の原理

●イギリスの自由主義を社会進化の頂点におく。

(3)スペンサーの評価

●自由主義を強調。こんにちの新自由主義は先祖返り？

●社会は、矛盾のないシステムであり、競争をとおして発展するという楽観主義。

●のちの機能主義的社会進化理論の先駆形態。

3. マルクス (Karl Marx, 1818 ~ 1883, G)



Karl Marx

(1) 革命思想家としてのマルクス

- ヘーゲル哲学を学び、1841年、イェナ大学で哲学の学位を取得。
- 『ライン新聞』の編集者(1841~43)。
- パリで『独仏年誌』を発行。エンゲルスと出会う。
- 1845年ブリュッセルへ。『ドイツ・イデオロギー』執筆。
- 1847年「共産主義者同盟」を指導。
- 1848年『共産党宣言』。ドイツ3月革命に参加。
- ロンドンに亡命。
- 1864年「第1インターナショナル(国際共産主義者同盟)」
- 1868年『資本論』第1巻刊行。

(2) 資本主義的生産様式

- 資本主義社会は、資本家階級と労働者階級の2つの階級から構成される。
 - ・資本家階級——生産手段を所有し、労働力と材料を購入して、商品を生産する。
 - ・労働者階級——生産手段をもたず、労働力を資本家に売って、賃金を受け取る。
- 労働価値説——商品の価値は、生産過程で投入された労働量によって計られる。

(厳密には、その社会においてその商品を生産するのに必要とされる平均労働量)
- 資本制生産様式と搾取
 - ・資本家は、貨幣資本 G を、生産手段 P_m (固定資本)、原材料 W (可変資本)、労働力 A (可変資本) の購入に充てる。これらはいずれも市場で調達される「商品」であり、価値どおりに交換される。(労働力の価値は、労働力の再生産費用である)。
 - ・生産過程で、生産手段の償却分と原材料と投入された労働量が、価値として製品 W' に移転される。製品は商品 W' として、市場に価値どおりに売られ、貨幣資本 G' を得る。
 - ・利潤の源泉は、投入された労働量が、購入された労働力商品の価値よりも大きいことからくる。なぜなら、労働力は、その使用によって価値を生産する特殊な商品であるから。これを絶対的剰余価値という。
 - ・このほかに、技術革新によって、市場価値よりも少ない価値の商品を生産することから生じる価値を相対的剰余価値という。
- 窮乏化仮説——資本家は富を蓄積するが、労働者は貧困化する。
 - ・労働者は、つねに労働力の再生産費用以上の価値を受け取ることはできない。
 - ・相対的過剰人口(失業者)のために、賃金が、再生産費用以下に切り下げられやすい。
 - ・資本家は、資本を蓄積し続けるが、市場における競争によって、非効率な経営は淘汰される。その結果、ますます少数の資本家の手に資本が集中する。
 - ・淘汰された資本家は、労働者に転落する。その結果、労働人口はますます増加し、労働者の窮乏化が進む。
- 社会的生産と資本主義的取得の矛盾
 - ・多くの労働者の協業・分業によって生産がなされているのに、その果実は、資本家の手に集中する。そのため、資本家階級と労働者階級の闘争が生じる。

(3)唯物史観

- 人間は、生活の社会的再生産において、自分の意志から独立した**生産諸関係**に入る。
- 生産諸関係は**物質的生産諸力**に照応している。
- 生産諸関係が、社会の**経済的構造**を形成する。
- 経済構造を土台として、**法律的・政治的上部構造**と**社会的意識形態**が対応する。
- 生産力の発展によって、**生産力と生産関係・所有関係との矛盾**が生じる。
- そのとき、社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激に変革される。
- 人間は、この衝突を意識して、**階級闘争**にかかわる。
- ひとつの社会構成は、それが包容しうる生産諸力が発展しきるまでは、けっして没落するものではなく、新しい生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会の胎内で孵化されおわるまでは、けっして古いものにとって代わることはない。
- 経済的社会構成として、おおざっぱに言って、**アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的**生産様式が相次いで現れてきた。
- 「ブルジョア的**生産諸関係**は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。...ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがってこの社会構成でもって人間社会の前史は終わる」(マルクス 1966、pp.15-17)

(4)共産主義への展望

- 工業化**は、労働者の革命的団結をつくりだす。「ブルジョアジーは何よりもまず自分自身の墓掘り人をつくりだす」(『共産党宣言』p.43)。
- 革命——階級闘争による国家権力の奪取**
「本来の意味の政治権力は、ひとつの階級が他の階級を抑圧するための組織された暴力である。プロレタリアートは、ブルジョアジーとの闘争において必然的にみずからを階級に結成し、革命によってみずから支配階級となり、そして支配階級として強制的に旧生産関係を廃止するが、他方またこの生産関係の廃止とともに、階級対立の存在条件、一般に階級の存在条件を、それによってまた階級としての自分自身の支配をも、廃止するのである」。
- 共産主義**
「階級と階級対立とをとともなう旧ブルジョア社会に代わって、**各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるような一つの協同社会**があらわれる」。(マルクス・エンゲルス 1952、p.56)。
- 「社会はその旗のうえにこう書くことができる——各人はその能力に応じて[働き]、各人にはその必要に応じて[与えられる]！」(マルクス 1954、p.45)。

(5)マルクスの評価

- 産業社会を、対立するふたつの階級から構成される**資本主義社会**としてとらえる。
- 共産主義の運動に強い影響を及ぼす。しかし、その帰結を予見することはできなかった。
- 政治的行為の機会・制約条件として、**経済システムの重要性**を指摘。
- 共産主義社会においても、生産力の発展を、社会の目標と見なす。

- 国家の経済介入や、中産階級の形成については予見できなかった。

参考文献

- マルクス、カール（杉本俊朗訳）. 1966. 「経済学批判 序言」『経済学批判』大月書店。
- マルクス、カール（選集刊行委員会訳）. 1954. 「ドイツ労働者党綱領評注」（ゴータ綱領批判）『ゴータ綱領批判 エルフルト綱領批判』大月書店。
- マルクス、カール（向坂逸郎訳）. 1969. 『資本論』第1巻（第1分冊～第3分冊）、岩波書店。
- マルクス、カール、フリードリッヒ・エンゲルス（マルクス・レーニン主義研究所訳）. 1952. 「共産党宣言」『共産党宣言 共産主義の原理』大月書店。
- 清水幾太郎. 1980. 「コントとスペンサー」清水幾太郎編『世界の名著 46 コント スペンサー』中央公論社。
- 友枝敏雄. 1981. 「社会進化論」安田・塩原・富永・吉田編『基礎社会学 V 社会変動』東洋経済新報社。